

妙好人の伝記採録の意図

——妙好人伝「五卷本」を中心に——

龍 口 明 生

はじめに

念仏者を妙好人と称するその最初の使用は、周知の如く、善導の『観経疏』『散善義』の流通分においてである。すなわち

若能相続念佛者此人甚為希有。更無物可以方之。故引分陀利為喻。言分陀利者。名人中好華。亦名希有華。亦名人中上上華。亦名人中妙好華。此華相伝名蔡華。是若念佛者。即是人中好人。人中妙好人。人中上上人。人中希有人。人中最勝人也。(大正三七、二七八頁上)

の文に基づいている。「分陀利」が華の中の妙好華であると同様に念仏を相続する者は人中の妙好人である、と。

ところでこの妙好人という語を念仏者全てを指す語としてではなく、或る観点から特定の念仏者を抽出して彼等を妙好人と呼び、彼等の行状を蒐集し、編纂したのは仰誓が最初である。その最初の妙好人伝である『親聞妙好人伝』の撰述以

降、所謂妙好人伝の撰述、出版は数多存在するが、そこに使用されている「妙好人」の指す意義内容は仰誓の意図するところとは必ずしも一致するものではない。この点に関しては既に多くの研究がなされている。土井順一氏は『親聞妙好人伝』の写本の調査に着手され、原典、写本、刊本の比較検討により、妙好人伝(五卷本)の編者である僧純の手により増補、改訂がなされていることを指摘され、その原因たる教団的、社会的背景にも言及された。⁽¹⁾そして朝枝善照氏、児玉 識氏により、また菊藤明道氏によっても僧純撰述以外の妙好人伝をも視野に入れ、各妙好人伝所載の妙好人の性格、或いは撰述者の視点が初期のそれと比較するとき次第に変移していることを明らかにされている。

本論では妙好人伝の撰述者の妙好人観の変遷を検討する。特に妙好人伝(五卷本)の撰述者である僧純に焦点を当てて伝記採録の意図を考察する。

一 僧樸の真宗門信徒観

僧樸は門信徒の信仰の実体について具体的な個人に注目し、彼等の伝記を蒐集するということは無かった。ただし門信徒が聴聞し報恩謝徳の念仏生活を送るに際しては如何にあるべきかについて僧樸は論じている。既に言及したことではあるが、僧侶については「坊主制戒」において、坊主については「坊守法語」において、また信者については『檀中制法』の中でそれぞれについて述べている。⁽²⁾これを要約すれば、坊主、坊主については日々の念仏も、また聴聞すべきことも敢えて言うまでもなく当然のことであるとし、信者についても謝徳の念仏を致し、聴聞に努め、怠るべきではないことを記している。

二 仰誓の『妙好人伝』編纂の意図

まず仰誓の門信徒観について言及し、次いで妙好人観について述べる。

(一) 仰誓の門信徒観

僧樸は仰誓の師である。師弟関係にある両者にとってその門信徒観も共通していたであろうと推測することは自然である。このことは『高城家儀』に拠っても伺うことが出来る。この『高城家儀』は仰誓の子息であり弟子である芳淑房履善

が住持としての仰誓の行状を記したものであるが、朝夕の勤行を初めとして、住職として務むべきこと、心得えておくべきことが四十三ヶ条にわたって記されている。朝枝善照氏が僧樸との関係に注意されているごとく、⁽³⁾僧樸、仰誓両者の門信徒に求める念仏者としての在るべき姿は同一なるものと言える。

(二) 仰誓の妙好人観

仰誓撰述の『親聞妙好人伝』は宝暦四年（一七五四）頃に編纂され、およそ三〇年後の天明四年（一七八四）には二巻本『妙好人伝』が撰述された。この両書を通じて知らされることは、正信念仏者が謝徳の念仏を称え、聴聞することは当然のことである、ということである。このことに対しては僧樸にとっても仰誓にとっても全く同じ姿勢である。しかしこの当然なことが現実には信者の間でしばしば実践されていないこともまた事実である。或る地方に於いては正信念仏者が多数を占め、聴聞に参集する者も多くいるであろうが、別の地域においては弥陀廻向の念仏が受け容れがたい状況にあり、また報恩感謝の念仏を称える人も稀な環境もあるであろう。仰誓が最初の妙好人伝の編纂を企画した動機も後者の如き状況に対処せんがためであったかと思われる。

曾て論じたことであるが、⁽⁴⁾仰誓の採録した妙好人説話は、どのような人であれ、如何なる環境に在ろうとも念仏を称し、

聴聞を怠らない人物を取り上げ、その信仰生活の一端を妙好人伝のなかで物語っている。

例えば、念仏を称するに好意的ではない他宗派の人々の中にあつても称名念仏を喜ぶ人、法座の開かれている場が遠隔の地であらうとも参詣を怠らない者、或いはまた多忙の最中に勤められている法要であらうとも馳せ参ずる信徒、彼等の信仰生活を仰誓が取り上げた理由は、彼等を褒め讃えることが目的ではなく、むしろ彼等の行為が当然であることを示すことにあつた。それでは如何様な人々を対象としているのか。たとえば、称名念仏することが許されない環境に住しているから、参詣するには地理的に不便であるから、更には時間的余裕が無いので、等々と陳弁をする信徒の存在が想定されるのである。この類の人々に対して念仏、聴聞を勧めるに際しては、妙好人伝所載の人々、所謂「妙好人」の宗教生活を語り示すことは有効な手段であつたと思われる。同時に彼等を説得するために聖教に基づく根拠も示されたであらう。

『觀經疏』『散善義』の正助二業の文

又就此正中。復有二種。一者一心專念彌陀名號。行住坐臥不問時節久近念念不捨者。是名正定之業。順彼佛願故。若依禮誦等。即名為助業。(大正三七、二七二頁中)

日常生活における「行・住・坐・臥」いずれの状況下であらうとも称名は可能である。

妙好人の伝記採録の意図(龍口)

また『顯浄土真実教行証文類』信卷の大信嘆徳の文

凡接大信海者、不簡貴賤縑素、不謂男女老少、不問造罪多少、不論修行久近、非行非善、非頓非漸、非定非散、非正觀非邪觀、非有念非无念、非尋常非臨終、非多念非一念、唯是不可思議不可称不可説信樂也。喻如阿伽陀藥能滅一切毒。如來誓願藥、能滅智愚毒也。(真宗聖教全書 二 宗祖部 六八頁)

ここには念仏者となるに何の妨げも無いことを説き示す。「貴・賤・縑・素」による差別も無く、「男・女・老・少」の区別等も無いことが謳われている。

三 妙好人伝(五卷本)の妙好人観

『妙好人伝』(五編)は僧純によって編集されたものである。この中、初編は仰誓撰述『妙好人伝』(三卷本)に相当する。第二編から第五編を僧純が撰述した。しかしながら初編の『妙好人伝』(三卷本)は僧純の手により改変されている。このことは土井順一氏の指摘するところであり、さらに朝枝善照氏、菊藤明道氏による研究がある。⁽⁵⁾

ここでは先ず各編における序文、或いは跋文を取り上げ、そこにおいて「妙好人」がどのような性格の門信徒として理解されているか考察してみたい。

(一) 誓鑑の妙好人観

『妙好人伝』初編は仰誓撰述の二卷本『妙好人伝』そのも

妙好人の伝記採録の意図（龍 口）

のであるけれども、前述の如く僧純の手によって改変されている。本初編の序文は僧純の依頼により出雲国徳応寺誓鑑が識したものである。

妙好人伝序

（前略）石見なる浄泉寺の先師実成院、其真実信心の人のおほかる中にも、殊にすぐれて世の人の則ともなるべき跡しあれば、聞くまゝに記し、見るまゝに集めて、妙好人伝となづけられしハ、今より後の世の人を、この法に誘引せんため、尚、真成報仏恩の一助にもとの心にて、かの光明大師、分陀利を論して、妙好華ともなづくとのたまひて、念仏者をも又、妙好人となづけたまへれば、此書をも妙好人伝と題せられたるにこそあらめ。凡、世の中にあらゆる人の、この静ならざることハ、春駒秋猿のごとく歴縁滞境してうつりやすく、一方にうつれば一方をわすれがちなるハ、世の常のならひぞかし。されバ、本願を信じ念仏を行ぜん人ハ、常にこの文をよみて、殊に勝れたる人の跡をあまんにして、このてかしはのふたおもてなく、とにかくに仏恩の方に心をうつし、報謝のつとめを忘れざらましかば、賢を見てハ齊しからんことをなど、いひけんためしともいふべし。（後略）（児玉 識・菊藤明道編『妙好人伝』一〇七―一〇八頁、大系真宗史料、伝記編8、法蔵館、二〇〇九年）

右は序文の抜粋であるが、全体としては仰誓の妙好人伝編纂の意図は正しく把握されていると言えよう、ただし「其真実信心の人のおほかる中にも、殊にすぐれて世の人の則ともなるべき」という理解は必ずしも仰誓の立場と一致するものとは言えない。多数の正信心仏者の中から「殊にすぐれて世

の人の則とも」なる信徒とは、如何なる点で特別勝れているのか、また他の人々の模範となるのか、誓鑑の見解は明らかではない。すでに仰誓の妙好人観との間には微妙な差異があると言えよう。仰誓の示す妙好人は怠惰なる者に対してその怠惰を反省せしめることを目的に彼等とは対照的な妙好人を語っているのであつて、決して彼等が「世に勝れた」信者であるという意図は無い。

（二）僧純の妙好人観

僧純は五編の妙好人伝の中、初編巻下に跋文、第二編巻下に附言、第四編巻上に序文、第五編巻上に自序を記している。以下各文に拠り僧純の妙好人観を伺う。

1 妙好人伝 初編 巻下の跋

跋

古文に、玉をもて宝とせず、賢者をもて宝とハするなりといへり。実に、千里かゝやかすハ人の徳なるべし。さるによりて、名たゝたる信者のおこなひを記して、末世の人をして見習ハしめんために、実成院仰誓師、この妙好人伝二巻をつづられたり。（二四三頁）（中略）誓師の書もらし給へる人、あるハ、師の没後に往生せし名高き信者の事を見聞のまゝに記して、続妙好人伝と題し、言葉のつたなきをもかへり見ず、只、報仏恩の一助にもと思ひて、遠からず華王樹にもものし侍らん。（二四四頁）

ここには仰誓の二巻『妙好人伝』の撰述に触れ、その目的を「末世の人をして見習ハしめんために」と記している。この

理解自体に何等問題は無いが、ただ何を末世の人々に見習わせようとするのかは明らかでない。そして「名た、たる信者のおこなひ」という表現をしているが、「名た、たる信者」という表現で以て僧純は仰誓の使用する「妙好人」の行為の何の面を評価しているのであろうか。また同様に「名高き信者」という表現も理解が容易ではない。僧純独自の特別の意味を含めて使用されていると受けとめるべきであろうか。

2 妙好人伝 二編 卷下の附言

附言

世に存命の人に、殊勝の信者と聞へたるも侍れど、はばかりあれば爰にもらしぬ。かつ広き国の中には、うつくしき信者も多かるべきに、見ずきかぬことのせんすべなければ、為法の人、前をとむらひ、後を導の心あらば、志をつぎてやまざらん事をねぎす。

(二八九頁)

右の文によれば「世に存命の人」を妙好人伝に採録することは、「はばかりある」と記されているが、念仏を喜ぶことが他者に知られることが本人にとって不都合となる、ということとは理解に苦しむ点である。仰誓撰述の『妙好人伝』には存命中の人も妙好人として採録されているのである。またこの附言にも「殊勝の信者」、「うつくしき信者」といった称する念仏にでは無く、称する人に焦点が当てられ、たたえられている。

3 妙好人伝 四編 卷上の序

妙好人伝四編序

夫、妙好人伝の初編ハ、実成院仰誓師の撰述にして、その記されたるゆゑんハ、迦才の浄土論ニ正信念仏の人の伝を二十人までのせて、但衆生智恵あさくして聖旨に達せざるゆゑ、現に往生する人を記さずハ勧進することを得ん、といへる文より發りて、二巻の伝をあらはせり。予、其志をつぎて、先のとし二編三編を述す。されハ、古徳のこと葉にも、前なるものハ後を導き、後なるものハ前を訪ふといふことあり。一日朋友某來りて、四編を綴らんことを頻に乞。予も又慚愧のたよりにもやと、こたひ此二巻を集めて因縁あらん人も誘引せんとおもふより桜木に物し侍りぬ。

(二四一頁)

ここには仰誓が『妙好人伝』の編纂を發起したのは迦才の浄土論によつてであるとしているが、『親聞妙好人伝』にも二卷本『妙好人伝』にもその旨は語られてはいない。因みに『浄土論』の当該箇所には

浄土論卷下 大唐弘法寺釋迦才撰

第六引現得往生人相貌(謂引道俗得往生人示諸學者)

道俗得往生淨土者。略有二十人(比丘僧六人。比丘尼四人。優婆塞五人。優婆夷五人)

問曰。上引經論二教。證往生事。實為良驗。但衆生智淺。不達聖旨。未若引現得往生人相貌。勸進其心。今即日取信。欣其聞進也。答曰。其得往生人。依經論咸得光臺異相者。其數無量。今略引四五。示諸學者。令見取信也

比丘僧得往生者六人

妙好人の伝記採録の意図（龍口）

方啓法師者。花蔭人也。貞觀九年。共玄果法師。於藍田縣悟真寺。一夏念阿彌陀佛。乃取一楊枝。著觀世音菩薩手中。誓云。若我念佛得往生者。願此楊枝七日不萎。依誓。遂即七日不萎也。此僧復為一切衆生請云。如攝論中判。作別時意。觀經中言即生。願於夢中見阿彌陀佛。請決此疑。即於其夜。唯在一處。三度作夢。初夢在一大池。西南有一高樓。此僧從樓而下。至池東北岸上。見一寶帳高二丈餘。面東開門。此僧忽爾飛入帳中。半身得入。還出。下至帳西。有大殿宇。中見一大德告云。但修淨土行。並生此帳中也。遂即睡寤復更作夢。在池北岸。見觀世音菩薩。面向北方。垂脚而坐。此僧遂以手捧菩薩足。頭上載之。見足下有千輻輪相。其菩薩身作閻浮檀金色也。忽然睡覺。更復作夢。於池南面。向西而立。自池已西。總皆是大水。滿中蓮華。忽見阿彌陀佛從西而來。至此僧前。此僧頭面著地禮拜。禮拜訖。即於佛前。胡跪合掌請云。娑婆世界衆生。依經修行。得生世尊國不也。佛即答云。善男子。一切衆生。但修淨土行者。並生我國。勿生疑也。（後略）（大正四七、九七頁上、下）

とある如く往生に関する奇瑞が語られ、夢に阿弥陀仏、觀世音菩薩に遇うことが語られている。僧純の編纂の妙好人伝中の妙好人達も多くは往生の有様、或いは奇瑞に触れられており、更には屢々往生伝からの転載がある。最初期の妙好人觀とは随分の隔たりがある。

4 妙好人伝 五編 上の自序

自序

（前略）過ぎたるよりハ足らぬをいとよしとすべきに、遠近の知己どもの許より、世に稀なる信者の振舞を書記、こも加へてよと

此処彼処より切に責もて来たれるを、うつ蟬のむなしくせんも本意なく、且ハ老の隙やり草二とて、此五編を撰ぶ事とハなりぬ。しかハあれと、更に他の為にハあらず。いさ、か報仏恩の片端にもとおもふより、昔を忍び今を思ひつどへつ、世の掟をだに守りなバ、老がよろこび此上やあるべきとしか云。（二八六頁）

この自序には僧純が既に四編もの妙好人伝を編纂して世に広めていることを知っている知人から彼の許へ「世に稀なる信者の振舞」を書き留めた文を持参して、次の妙好人伝に是非掲載してくれ、といった依頼の状況が呈されている。この事実は門信徒を初めとする妙好人伝の読者の懐く妙好人とは、何か特別の雰囲気を帯び、功德を有している人物像となり、妙好人伝に掲載されることが名誉であるかの如くに信徒達には捉えられていると言つて良からう。

四 妙好人觀の変遷とその受容

僧純編五卷本妙好人伝の序文、跋文等の検討に拠り、僧純の妙好人觀の変遷を辿った。そして妙好人伝の読者或いは聴聞者達が説法場で語られる妙好人像により、意義内容の變化した妙好人觀を受容したであろうことが知られる。

ところで当の僧純は妙好人と往生の奇瑞等との関連について取った姿勢はどうであったか。

『妙好人伝』二編上の「筑前明月女」の説話は次の如くで

ある。

其墓より一茎の蓮生じ、(中略) 其根、くだんの明月が口中より出でたり。(中略) 今の世までも奇談となれる事なり。つらつら案ずるに、普賢菩薩は室の遊君と現じ、衆生を導引給ひしも、斯ることにやあらん。ただし、浄土真宗にハ、唯仏願の不思議を尊ミて、機辺の奇特をかたるをよしとせず。されど、法徳に約して又あふぎ貴むべき義なきにしもあらず。(一四六頁)

浄土真宗では往生の奇瑞、門信徒の側の奇特を語るべきでは無いことは編者僧純は充分承知している。しかしながら仏法の徳を讃嘆するのに、門信徒の不思議を語ることは意義のあることであるという態度をとっている。この態度は浄土真宗の教義を熟知している僧純に取っては何等問題は無いであろうが、一般の門信徒に取っては只その奇瑞のみが有難く受け容れられる危険性が大きいであろう。

むすび

『観無量寿経』で「芬陀利花」と言っているのは、「若念佛者。當知此人即是人中芬陀利花。觀世音菩薩大勢至菩薩。為其勝友。當坐道場生諸佛家」(大正一二、三四六頁中)とあるが如く、念仏を称する者が芬陀利花と呼ばれているのであり、『観經疏』「散善義」の中で「妙好人」等と讃えられているのも、念仏を相續する者を称しているのである。この「妙好人」という語を仰誓は常に念仏を喜ぶ人を称するに使用してい

る。陳善院僧樸に関連して『妙好人伝』四編 卷上には濃州樹誓の話が掲載されている。前半は樹誓の坊守としての生活の描写である。

縁覚寺の坊守千代女ハ、御法義にこころざし厚くして、(中略) 有縁の同行、庫裏へ参詣のせつハ、御法義の物がたりをして、実意より誘われしゆへ、みなみな帰依せしとなん。(二四三頁)

この坊守に宛てて僧樸が出状している。次がその陳善院釈僧樸の手紙である。

濁らバにこれ、すまハすめ、と我心に目をかけずして、よきにも悪きにも念佛申外他事なき御事に候。(中略) 只願くハ、日夜の内に浮生夢幻といふことを両三度ほとづ、おもひたまひて、御恩の称名怠あるまじく候。(二四三―二四四頁)

このことは仰誓も既知の事であつたと思われるが、仰誓は樹誓を妙好人伝には採録していない。彼女を妙好人と見なしたのは僧純である。いずれにせよ仰誓と僧純の間には妙好人観に大きな隔絶があると言えよう。

最後に、僧純が往生を語り、奇瑞を語る。それが正信念仏への導入であつたとしても、それではそれらの説話に耳を傾けた門信徒に対して、正法を語る機会は考慮されていたのか、新たな課題が生じて来る。

1 土井順一「仰誓撰『妙好人伝』攷」(『国文学論叢』第二十三

妙好人の伝記採録の意図（龍口）

輯、昭和五十三年）、「仰誓撰『妙好人伝』の変質―幕末における『妙好人伝』出版の意味―」（『佐賀龍谷短期大学紀要』第二十六号、昭和五十五年）。

2 龍口明生「僧樸における真宗門信徒のあり方」（『印度学仏教学研究』一二〇号、平成二二年）。

3 朝枝善照「芳淑房履善記『高城家儀』考」（『龍谷史壇』北村敬直博士還暦記念特集七十九号、一九八一年）。

4 龍口明生「仰誓の妙好人観」（『仏教史研究』第十四号、昭和五十五年）。

5 土井順一 同上論文。朝枝善照「初編『妙好人伝』の一考察」（『仏教史学研究』第二十卷第二号、一九七八年）。菊藤明道著『増補版 妙好人伝の研究』法蔵館 二〇一一年。

6 以下、五卷本『妙好人伝』からの引用は同書に拠り、頁のみを示す。

〈キーワード〉 五卷本妙好人伝、僧樸、仰誓、僧純、妙好人、妙好人観

（龍谷大学名誉教授）

新刊紹介

菅原 信海・田邊 三郎助 編

『日光 その歴史と宗教』

B六版・三五八頁・本体価格三、二〇〇円
春秋社・二〇一一年一〇月